

使徒言行録9章1節—19a節

『呼びかける声』

今朝の聖書箇所はパウロの回心の出来事が記されている大変有名な聖書箇所です。回心という言葉、これは教会でしばしば使われる言葉ですが、どういうことを指す言葉なのでしょう。回る心と書く回心を教会では使いますが、心を改める、という書く改心とはどう違うのでしょうか。

さて、今日の聖書では突然、パウロの回心が出てきた、というような印象を持つ方がおられるかもしれません。いきなりパウロ。いきなり回心、という印象です。確かに、パウロはここ以前にも、ほんのわずか出てきます。サウロという名前で。(パウロは名前を二つ持っていました。サウロというユダヤ名、とパウロというギリシア名。わかりにくくなりますので、パウロで統一して彼のことを呼んでいくこととします。)けれども、使徒言行録の著者ルカは福音の伝道がエルサレム、ユダヤ以外の地で始まった様子を書き進め、ここに至るまでに、サマリア人の回心、エチオピア人の回心とあって、パウロの回心、と伝道が進展していく様子をえがいているのです。つまりルカは、伝道の推進と回心というドラマとが、連鎖して起こっていることを、その一つの出来事としてパウロの回心が描いているのだ、ということがわかるのです。

パウロは外国生まれのユダヤ人キリスト者で、ギリシア語を話すユダヤ人でした。ユダヤ教の熱心な信仰者で、律法を学び、律法を守り、律法に生きることに於いて、誰にも引けを取らない者として歩んできました。その彼にとって、キリスト教徒たちは、イエスという間違っただけのものを神の子として信じる者たちで、それはパウロたちユダヤ教徒からすれば、神を冒瀆し汚すことに他なりません。彼はキリスト教徒を迫害しました。しかしそれはたんに、キリスト者が憎いとか、嫌いだという理由からではなく、神にたいする熱心からでした。信仰の熱心から出た、やむに已まれぬ行為だった。だから、彼はもちろん、善いことをしていると確信していた。

そのパウロに回心ということが起こる。

どうしてそんなことが起こるのでしょう。例えば、自分のしたことがはじめは悪いことだとは思っていなかったが、そのことを誰かに意見され、忠告を受け、自分でもよくよく考えるうちに、自分のしたことは間違っていた、ということに自覚し、悔い改める、というようなケースとは全く違います。パウロは

悪いことをしているという自覚は全くなかったと思います。それどころか、善いことをしているという自覚満々だった。しかもパウロはそれは神への熱心ゆえと信じていた。パウロは誰かに意見されたわけでも、忠告を受けたわけでもなかった。それなのに突然回心です。

「ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいた時、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか。」という、答えがあった。「わたしはあなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすればあなたのなすべきことが知らされる。」これがパウロが回心していくドラマの始まりです。ここからわかるのは、パウロの内面的な事情や、心の動きなど、何一つ、回心のきっかけになっていない、ということです。ただ、呼びかける声があったと聖書は語っているのです。その呼びかける声、呼びかける存在にパウロは出会った、ということ、それだけです。

この後、パウロが地面から起き上がると彼は目が見えなくなっていた。そしてパウロは言われた通り町に行き、そこで神が遣わした人、アナニアに遭うのです。

アナニアは幻の中で語りかける主に対して、「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。」そう言って主の言葉に抵抗するのです。当然といえば当然です。なぜ自分たちを迫害する人のところにわざわざ私が行かなければならないのですか、ということです。ところが主は「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」パウロはこの言葉を聞いてはいない。聞いたのはアナニアです。しかしここからわかるのは、主はパウロをよりによって福音を宣べ伝える者として選び、キリストの名の故に苦しむことすら担っていくものとする、と意志しておられるということです。

わたしたちはいったい誰が神の僕として選ばれ、誰が選ばれた器となるのか、わからない、ということです。アナニアが、あの人は無理です、あの人は論外です、と思った人物が選ばれていくのです。

アナニアは自分の意志に逆らって、神の言葉に聞き、ユダの家にいるパウロに会いにいきます。そしてパウロの上に手を置き、あなたに現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、聖霊で満たされるよう

にと、わたしをお遣わしになったのだ、と語るのです。するとパウロの目から鱗のようなものが落ち、見えるようになり、パウロはそこで洗礼を受けた、というのです。

読めば読むほど不思議なドラマ（事件）です。パウロが遭遇したのは、光が彼の周りを照らし、呼びかける声が聞こえた、というだけです。それどうして、あれほどの熱心に生き抜いてきたパウロの回心を引き起こしたのか、どうにもよくわからない。ここには何の納得いく説明も、解説も、パウロの内面の変化もえがかれていない。ただ、あれほど神にたいする熱心からキリスト教会を迫害していたパウロが、呼びかける声に聞き、イエス・キリストを信じる洗礼を受けた、ということが報告されているのです。こうした聖書個所で、聖書に書かれていないことを勝手に思い描いて、実はこの回心の背景には、こういうことがあったのだ、というような推測するような解釈は慎まなくてはなりません。むしろ書かれていることそのものに、思いを寄せるべきです。

はじめに、回す心の回心と、心を改める改心とはどう違うのか、ということを申し上げましたが、聖書に即していえば、心を改める改心は人間の力です。善くなかった、ダメだった、と反省をし、心を入れかえていこうと努力する、人間の力でしようとするのが改心です。しかし回す回心は人間の力ではなく、神の力によるもの、神の働きによるものだ、ということです。パウロはここで、まさに神による回心を経験していく。自分の力や、自分の内面の変化で、心を改めているのではない。

パウロはここで、自分に語りかける声、呼びかける声に聴いた。キリストが、パウロに向かって、わたしはあなたが迫害しているイエスである、と言われた。キリストにとって教会や、キリスト者への迫害は、自分への迫害そのもの。その迫害を受けているキリストがパウロに呼びかけてきたのです。そしてそのキリストがあなたがなすべきことがある、と言われたのです。まだその中身も、どんな使命なのかもわからない。しかしキリストはパウロが攻撃し、その信者に対し殺意を抱いたほどの存在です。そのキリストの言葉が、パウロの中に入ってきた、ということです。キリストの存在がパウロの中に入ってきた、ということです。キリストの愛とか、恵みとか、そういうことはみんな後からわかっていったことです。パウロはここで、キリストの十字架の愛とか、その恵みが瞬時にわかったというようなことではないでしょう。しかし、キリストの言葉が自分の中に入ってきたのです。そしてその言葉は自分の中からどかない。サウル、サウル、と自分の名を呼びかけてくるキリストが自分の中からどう

とはしない。キリストの言葉が存在が自分の中にいつづける、ということです。その言葉に驚掴みにされる。わたしはここをうまく説明できるとは思っていない。そもそも説明などできない。しかし、回心ということのもっと深い根っこのところにあるドラマとは、こういうことです。その人の中に、これまで自分が聞いてきたのとは違う声が聞こえてくるのです。それはパウロの意思や、パウロの考えとは違う。感情とも違う。突然光が彼を照らし出したように、突然射抜いてくるのです。それはパウロだけの特別な経験、というわけではない。洗礼へと導かれた者は皆、そういう声に出会っているのです。キリストの声、神の声です。キリストの存在です。そこにキリストが立っているのです。そしてそれまでのその人の歩みがどのようなものであれ、何を信じ、何に熱心で、何に取り組んできたにせよ、その人に呼びかけ、その人をキリストの言葉に向かわせる。その言葉を聞いて、その言葉の方に歩いていくことを促す。そういうことを一人一人、何らか受け止めてきたのです。

多くの人は、自分の回心体験と呼ぶべきものは見当たらない、と思っているかもしれません。ドラマ、事件として報告するような回心は特に体験していません、と思っているかもしれません。しかし、呼びかけるキリストの声、それはパウロにとってもこれ以前にも与えられていたのかもしれませんが、彼はこのときこの声と出会った。そしてそれに聞いた。それがドラマ、事件の核心です。それは、わたしたちにも起こっているドラマなのです。パウロは祈った、とあります。呼びかける声を与えてくださっている方に、父なる神に祈ったのでしょう。そしてアナニアと出会い、目が見えるようになった、目から鱗のようなものが落ちたという。それはまさに彼の中の眼が開いていく経験だったし、彼はそこから新しい歩みを始めた、ということです。パウロはこの回心体験から、まちがいなく受け取ったことがあります。それは、キリストはこのわたしに、呼びかけてくださる方、呼びかけ続けてくださる方だ、ということです。そして彼は生涯、その声に聞き続けた。声に聞き、従い、歩んだ。神による回心を信じて歩んだ。わたしたちもそのように歩みたいと思います。